

文化

千代田
316030

【連続講座】

武士の権力論 第八弾

講座概要

武士といっても源頼朝（みなものよりともし）、足利尊氏（あしかがたかうじ）、織田信長（おだのぶなが）、徳川家康（とくがわいえやす）など、人物によって武士に対するイメージが異なると思います。平安時代後期に誕生する武士と江戸時代の武士とは武士と言っても相当こととなります。武士とはそもそもどういう存在か。

そうした、素朴な疑問を「権力」という視点から考える講座の第8弾です。

今回の連続講座では、武士のもつ「権力」という視点から、特に戦国武将を中心とした武士に焦点をあてます。

講座No.	日 程	講 師	タイトル
316030	全講座（7回）		
316030a	10月20日（日）	本学教養教育リサーチセンター研究員 東京大学史料編纂所非常勤職員 生駒 哲郎	室町幕府と祈願寺
316030b	11月17日（日）	東京都市大学准教授 丸島 和洋	武田信虎は暴君であったのか
316030c	12月22日（日）	日本大学助教 小川 雄	徳川権力と水野一族
316030d	1月12日（日）	國學院大学兼任講師 國學院大学研究開発推進機構客員研究員 立正大学非常勤講師 堀越 祐一	五大老再考 —豊臣末期の政治構造を読み解く—
316030e	2月9日（日）	本学非常勤講師・武蔵野学院大学教授 高橋 恵美子	『葉隠』と中世軍記史料
316030f	2月23日（日）	東洋大学非常勤講師 柴 裕之	織田権力の関東仕置と滝川一益
316030g	3月1日（日）	大正大学専任講師 木下 昌規	足利義植と明応の政変
時 間	13:00～14:30		
受 講 料	*全講座（7回）お申込み 10,000円（全7回） *お好みの講座を選んでお申込み 1,500円（1講座につき）		
場 所	千代田サテライト教室（武蔵野大学附属千代田高等学院・千代田女学園中学校内）		
・駐輪場、駐車場はありませんのでご了承ください。			

担当講師	講義内容
講座No. 316030a	室町幕府と祈願寺
<p>本学教養教育リサーチセンター研究員 東京大学史料編纂所非常勤職員</p> <p>生駒 哲郎</p>	<p>中世においては、合戦の相手を祈祷によって調伏することは、ある意味で武力ととらえられる面がありました。</p> <p>南北朝の動乱期、北朝側の足利尊氏、南朝の後醍醐天皇はそれぞれ、相手を調伏するために寺院の祈願寺認定をしていきました。両者とも現実的な効力を期待してのことです。</p> <p>ただ、足利尊氏が祈願寺に認定した寺院を調べると、実は、鎌倉幕府が蒙古襲来のときに蒙古を調伏するために祈祷を依頼した寺院と重複することがわかります。</p> <p>つまり、足利尊氏の祈願寺はすでに、鎌倉幕府に先例があったのです。こうした視点で、寺院の武力という側面で、武士と寺院との関係を考えていきたいと思います。</p>
講座No. 316030b	武田信虎は暴君であったのか
<p>東京都市大学准教授</p> <p>丸島 和洋</p>	<p>2019年は、甲斐の戦国大名である武田信虎が、新たな本拠甲府を築いてからちょうど500年にあたります。武田信虎は、嫡男の晴信（信玄）に追放され、「暴君」というイメージが強い人物です。たしかに、信虎追放を聞いて、甲斐の人々は歓喜の声で新当主武田晴信を迎えたという記録ばかりが残ります。</p>
講座No. 316030c	徳川権力と水野一族
<p>日本大学助教</p> <p>小川 雄</p>	<p>水野氏（緒川家）は、徳川家康の生母於大（伝通院）の実家として知られ、その縁によって、江戸時代には、多数の大名・旗本に分立していきました。</p> <p>徳川氏と水野氏の関係は、まず三河・尾張両国の「境目」という環境の中で形成されました。本来、徳川氏にとって、水野氏は対等の提携相手であり、若年期の家康は叔父の水野信元を頼りにしていましたが、信元の横死を経て、水野氏は一旦没落します。その後、信元の弟忠重を新たな当主に据え、水野氏は再興して、織田氏・羽柴氏と徳川氏の外交関係を周旋する役割も担います。</p> <p>また、17世紀に入ると、水野氏は徳川将軍家の譜代大名に位置付けられ、三河・尾張両国の「境目」から離れて、各地に分立して、将軍家の全国統治を支えています。とくに宗家の勝成は、西国支配の重鎮となります。また、忠之・忠友・忠成・忠邦・忠精などは、老中に就任して、幕政で重要な役割を果たしました。</p> <p>本講義では、徳川権力の変容（地域権力から全国政権へ）とともに、緒川水野氏の態様も「境目」の国衆から転じてプロセスを浮き彫りにします。</p>
講座No. 316030d	五大老再考 —豊臣末期の政治構造を読み解く—
<p>國學院大学兼任講師 國學院大学研究開発推進機構客員研究員 立正大学非常勤講師</p> <p>堀越 祐一</p>	<p>慶長3年（1598）8月18日、豊臣秀吉が死去して以降、豊臣政権は五大老・五奉行による集団指導体制に移行します。とはいえ、両者の力には大きな開きがあり、五大老は上位機関として五奉行に命令を下す立場にあったと理解されています。また近年では、五大老のなかでも徳川家康と前田利家はとくに大きな実力を有していて、事実上「二大老」制とも言うべき体制であったとの見解も出されています。しかし、わたしはかねてより、五大老ではなく五奉行こそが主導的立場にあった可能性を指摘してきました。「五大老が権威ある存在であったことはたしかだが、権限まで掌握していたとは言えない。むしろ実権は五奉行にあったとみなすべきである」そのように考えましたが、従来の定説の壁はなかなか崩すのが難しいというのが現状です。そこでいったん原点に立ち返って、まずは五大老の政治的地位や実際に行っていたことを整理してみたいと思います。また、いまだに解決していない成立時期についても検討します。さらに「二大老」制についても、秀吉の決定を覆すことができた希少な存在であったとの説が出されていますが、それについても自説を提示してみたいと思います。</p>
講座No. 316030e	『葉隠』と中世軍記史料
<p>本学非常勤講師・武蔵野学院大学教授</p> <p>高橋 恵美子</p>	<p>江戸時代中期に成立した『葉隠』は、隠居した佐賀藩士山本常朝の語りを当時の佐賀藩士であった田代陣基が聞き取り編集したもので、写本は佐賀県内数所に伝わるのみの書物ですが、「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」という有名な一文とともに常朝の理想とする武士の姿を藩主・藩士の多様な挿話や史料の引用によって紹介したものです。本書のなかで常朝は近世を生きる武士の在るべき姿を語りますが、その比較として中世に成立した軍記物に描かれる武将の挿話が引用されています。戦場における生き様を描いた中世の軍記史料が、戦場での活躍から離れた近世の武士によってどのようにとらえられ紹介されていたのか、『葉隠』の引用記事から探っていきましょう。</p>
講座No. 316030f	織田権力の関東仕置と滝川一益
<p>東洋大学非常勤講師</p> <p>柴 裕之</p>	<p>天正10年（1582）3月、織田権力は甲斐武田氏を滅亡させようとして、「東国御一統」という情勢をもたらすこととなります。それでは、その情勢は、どのような過程を経て至ったのでしょうか。また、そのうえでの関東仕置によって、織田家重臣の滝川一益を通じた運営が進められていきます。その運営は、6月の本能寺の変の勃発によって終結を向かえることになってしまいますが、そこで進められた統合と私行為の禁止という事態（「惣無事」）は、その後の東国動向に影響を与え、やがて織田家に代わり天下人へと歩むことになった羽柴（豊臣）秀吉が関わり始めていきます。この講義では、そうした織田権力による関東仕置について、「東国御一統」といわれた情勢や滝川一益の活動などに注目したうえで、その実態と展開をみていきます。</p>
講座No. 316030g	足利義植と明応の政変
<p>大正大学専任講師</p> <p>木下 昌規</p>	<p>室町幕府史において、応仁・文明の乱以上に大きな転換点となる事件があった。それが明応の政変と呼ばれる事件である。応仁・文明の乱終結より15年後に発生したこの政変により、第10代将軍足利義植が解任されることとなる。そのため、畿内の本当の戦国時代はこの政変からはじまるともいわれる。この事件は戦国史においても決して外すことができない事件であるものの、なお一般的には認知されているとはいえない。そのため、今回は明応の政変とは何か、何故政変が起こったのか、その影響は何か。これらについて、関係する人物や時代背景から迫っていく。</p>